

【26】硫黄島にて

私の知らぬ義父は、昭和20年3月の硫黄島玉砕で戦死したことになっています。義母から聞いた話では、国から届いた白木の箱には、ただ名前が書かれた一枚の紙が入っただけでした。戦死者2万人の一人として今も硫黄島の地下に埋もれているのでしょう。

守備隊総司令官の栗林忠道中将は旧日本陸軍の軍人としては現在大変評価の高い人ですが、最後に内地へ送った辞世の句が、

国のため重き務めを果たし得て
矢弾尽き果て散るぞ悲しき

というものです。

ところが大本営は、新聞発表するとき終わりのところ “散るぞ悲しき”を”散るぞ口惜し”と改竄したのです。当時の戦争首脳部の意に反するところだったのです。

その後、幾星霜、平成6年、硫黄島を訪問された天皇陛下の御製の歌は、

精魂を込め戦ひし人
未だ地下に眠りて島は悲しき

とあります。

天皇陛下（現上皇陛下）は、栗林中将の辞世の歌を御承知で、歌の結びを”悲しき”とされたのではと、何人かの著者が推しはかっていますが、末席ながら私もその一人です。

（参考） 散るぞ悲しき、 梯 久喜子、 2005、新潮社。